

「雨の前日の夕焼け」

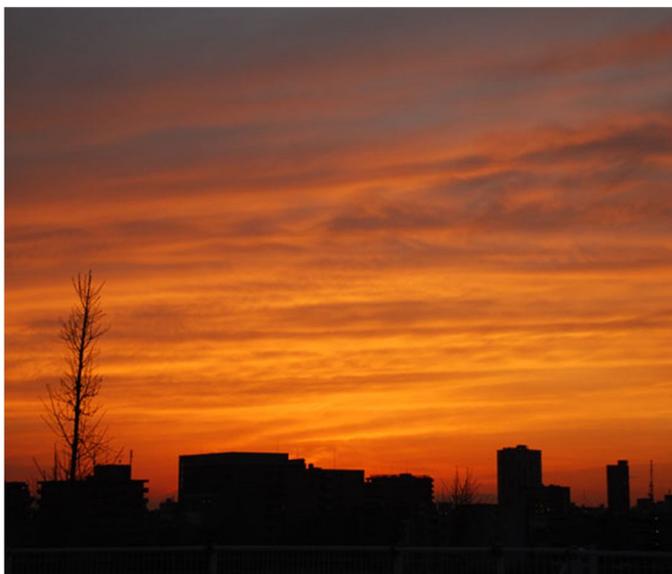
お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

天気のことわざを「天気俚諺(りげん)」という。一方、空模様を見て、近い日時の天気の変化を予報する手法を「観天望気」という。これらは厳密には分けて考えるべきなのだが、混同されているものが多い。どちらかといえば、「観天望気」のほうが、局所的な気象現象による天気変化の予報に使われる、というイメージが強い。

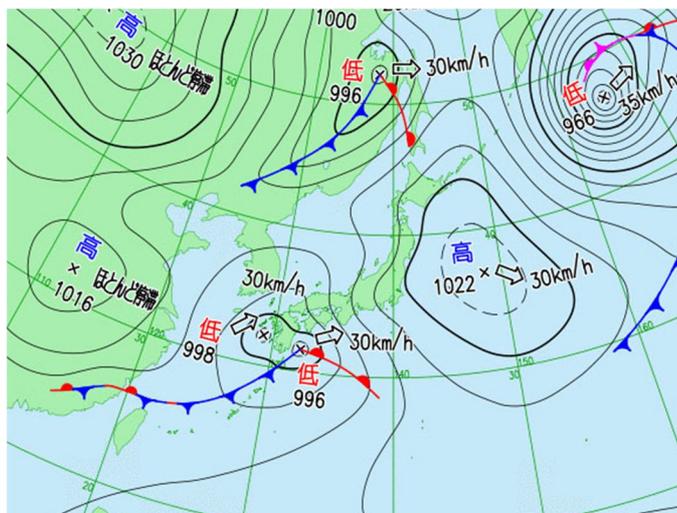
例えば「夕焼けの翌日は晴れ」というものがある。これは有名な「天気俚諺」で、教科書にも載っている。夕焼けが見えるということは、西の空が晴れているということで、西から東に天気が変わる日本列島では、その晴れ間が、翌日に観測地に来る、という理屈だ。しかし、この天気俚諺は必ずしも当たらない。



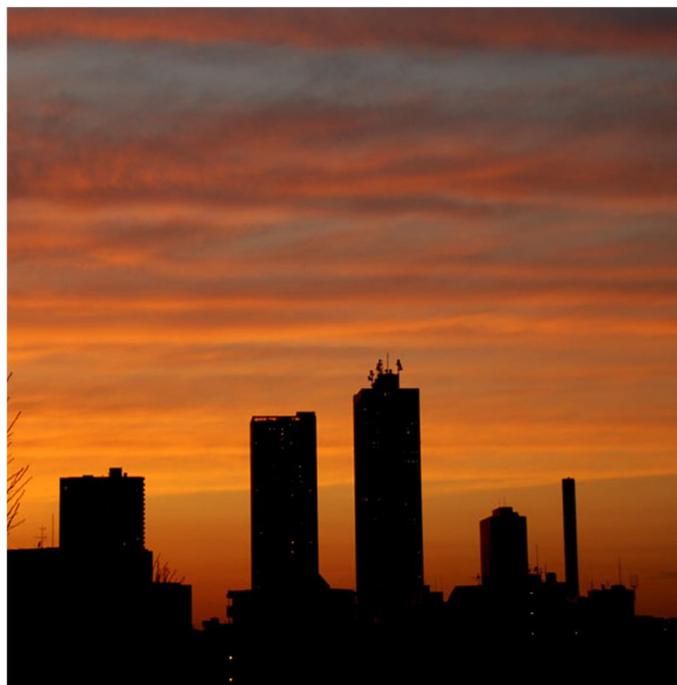
先日の夕方、実に美しい夕焼けが、西の空に見えていた。しかし、翌日は南岸低気圧の通過で、ほぼ一日中(午後はやや激しい)雨になった。



重要なことは、「夕焼けが見えているか見えていないか」ということではない。その夕焼けが、快晴の夕焼け、雲のある夕焼けなのか、雲があればその雲種は何なのか、ということが大切なのである。



この日の夕焼けを形成していたのは、「帯状高層雲」と呼ばれる雲である。これは、上層大気が不安定になり始めている証拠で、すでに近く(観測地の西側)に低気圧や前線が迫っていることを意味する。尚、「帯状高層雲」は「波状高層雲(連続した波を下から見たような雲)」とは別もので、「波状高層雲」の場合は、雨が降ったとしても一時的なことが多い。



結果的にこの夕焼けは「晴天の兆し」ではなく、「荒天の兆し」であった。しかし、天気変化とは無関係に、この夕焼けは純粋に美しかった。私はこの写真を小さく印刷して、3年生の子どもたちに配ることにした。

※写真はお茶の水女子大学構内で撮影。